

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Economic Specialization, Markets and Merchants: The Mixe Sector of the Oaxaca Market Economy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004489

生 業, ^{いち}市, 商 人

——オアハカ地方経済の中のミヘ社会素描 (メキシコ)——

黒 田 悦 子*

Economic Specialization, Markets and Merchants:
The Mixe Sector of the Oaxaca Market Economy

Etsuko KURODA

This paper attempts to locate the Mixe economy within the overall Oaxaca market economy. The first part locates the *sierra* Mixe market system within the total Oaxaca market networks, the Mixe system being compared with the *región* model of Chiapas. Mixe dependence on the Mitla and Yalálag Zapotecs is the consequence of the developed economic specialization in the Zapotec villages, and the monopolistic activities of the Zapotec merchants in the Mixe markets who are in turn controlled by the Oaxaca city merchants. Thus in the second part of the paper the underdeveloped economic specialization in Mixe villages is contrasted with the rich specialization in Mitla and Yalálag. In the third part the various types of Mixe merchants and their activities are presented in terms of their cooperative and competitive relationships with the Mitla and Oaxaca merchants, and in the fourth part non-economic factors and elements in the Mixe markets are noted for attention in the future study of the markets.

はじめに	カとの関係において——
1 オアハカ州の市場網の一部としてのミヘ社会	3 ミヘの市, サボテカの市, オアハカ市の市にみる商人の分化
——チャパス州との比較において——	4 市場の経済外的要素
2 ミヘ社会の生業と職業の分化——サボテ	おわりに

* 国立民族学博物館第4研究部

はじめに

共同研究「職業の発生と分化」の一端を担う研究ノートとして当稿を書いているが、私が扱うミヘ社会では若干の職業の分化がみられるとしても、生業の分化の方が明確にみうけられる事実なので、生業が優先する社会において市を媒介として商人の存在が分化している様を伝えたいと思う。

第1章はミヘ社会を広くオアハカ地域社会の一部として把握する試みである。ミヘ社会を完結した経済統一体と考えることは不可能であり、オアハカ州全体の市場網の一部として捉えねばならない。さて、オアハカ州の地域社会を考察するにあたってはチャパス州のモデルとの比較から出発するのが得策と思われる。チャパス州のラディノ(=メスティーン)の町サン・クリストバル・ラス・カサス(以下ラス・カサスと略す)とそれを中心にして太陽系のように存在するインディオ村落共同体の両者をセットにしてとらえた「地域モデル」(*región model*)は1950年代に Aguirre Beltrán [1954] によって提唱され、以降 INI(国立インディオ研究所)によるインディオ対策立案のモデルとして使われてきた。この一般に普及したモデルとの比較においてオアハカ州を考え、その中にミヘ社会を位置づけることはメキシコ全体の中での両者の位置を明らかにすることになるだろう。

第2章ではミヘ社会の生業の分化を周辺のスボテカの村々の生業との関連において捉えたい。スボテカの村、特に平地スボテカのミトラと山地スボテカのヤララグは経済上ミヘ社会を支配しており、ミヘの村にみられる生業の分化はスボテカの村の生業とのかねあい存在しているからである。

第3章はミヘ社会にみられる商人の分化をミトラとオアハカ市の商人の活動との関連で捉えようとする試みである。ミヘ社会、スボテカ社会、オアハカ市へと視点を移す時、三つの社会の生業と職業の発達に明白な差があり、そこで市が発達し、商人が活躍する理由がでてくる。ミヘの商人の分化は特にスボテカ商人の活動を前提にしてこそ、その実態がとらえられる。

第4章では職業に伴う個性と特徴を考える一助とするために市で動く商人の特徴や市でみられる経済外的要因や要素を素描してみた。

1. オアハカ州の市場網の一部としてのミヘ社会

——チャパス州との比較において——

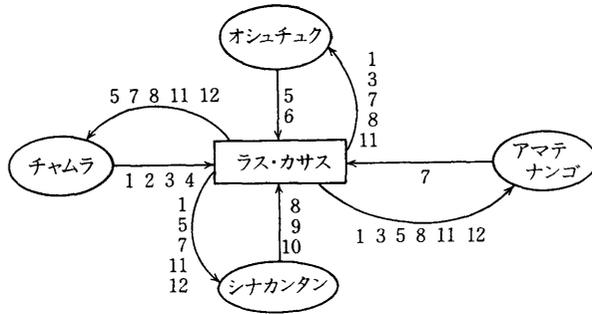
オアハカ州でミヘ社会が経済上おかれている位置を明確にするための前作業として、チャパス州のモデルを検討したい。このモデルと照し合せることにより、オアハカ州およびミヘの位置がより明瞭に浮び上がってくるからである。

1950年代にチャパス州に INI の出張所を設立するにあたって Aguirre Beltrán が立案したチャパス州を理解するためのモデルは二つの文化（インディオとメスティーソ）をつなぐ地域概念を強調したものであった (*región inter-cultural*)。このモデルは Alfonso Caso の閉鎖的なコミュニティ (*comunidad*) のモデルの欠点をカバーすべく提出されたもので、インディオ社会を閉鎖的コミュニティとして把握せず、地域社会全体との連関で理解しようとする試みであった。具体的には、ラス・カサスを経済の中心としてメトロポリ (*metrópoli*) となづけ、その周辺に位置しメトロポリに依存するインディオ社会全体（ツェルタル・ツォツィルの村落共同体）を含めて一つの地域 (*región*) として把握しようとするものであった。つまり、支配者としてのラディノの住む一つのメトロポリと背後の数々のインディオ村落共同体が一つの地域単位になる。

さて、この地域モデルは応用人類学者の書き物に度々現れながら、その実像はかならずしも明らかではなかった。そこで、Siverts の資料に依拠しながら以下、このモデルの実態をみてみよう。

図1から明らかのように、シナカンタン、チャムラ、オシュチュク、アマテナンゴといった代表的インディオ村落の産物は一応ラス・カサスに持ちこまれ、この市を媒介として、再び他のインディオ村落に分散される。もちろん、物資の一部はラス・カサスのラディノの需要に供せられる。祭具と道具類はラス・カサスの独占的品目であり、ラス・カサスから一方的にインディオ村落に流れていく。ラス・カサスを媒介としないインディオ村落間の産物の流れ（テネハパからチャムラに入るオレンジ、イシュタパからシナカンタンに入る塩）はあるが、規模からみて大きな流れではない。

さて、それではラス・カサスはいかなる意味でメトロポリたりうるのか。表1に明らかのように、ラス・カサスは11のバリオに分れ、バリオ別分業がみられ、大半がインディオ村落にない職業の専門分化を示している。この専門職種はラス・カサスのラディノと周辺のインディオ人口の需要をみたしている。つまり、インディオ社会には



- | | |
|---------------|-----------|
| チャムラ | アマナテango |
| 1 楽器 | 7 水がめ, 陶器 |
| 2 薪, 炭 | シナカンタン |
| 3 ウール地 | 8 イシュタパの塩 |
| 4 テネハバからのオレンジ | 9 花 |
| オシュチュク | 10 トウモロコシ |
| 5 繊維, ひも類 | ラス・カサス |
| 6 卵, 鳥類, 豚 | 11 祭具 |
| | 12 道具類 |

図1 ラス・カサスを中心とする産物と商品の流れ
([Siverts 1969a: 107] の図より)

表1 ラス・カサス市のパリオ別分業 ([Siverts 1969b: 4章] より)

パリオ名	職業の分化
サンタ・ルシア	花火職人
アルモロンガ	肉屋, 家畜商人
クスティタリ	豚の買いつけ, 屠殺, 販売 (内婚率が高い)
セリーヨ	鍛冶屋, 金具職人, 楽師, パン屋, 靴屋
ラ・メルセド	小規模の商人, 機械工
サン・ラモン	陶工 (ガラスの上塗りを行なう)
メヒカーノス	織工, 洗濯屋, 染物屋
サン・ディエゴ	馬子 (ラバをひく), 粉ひき屋 (トウモロコシ)
サン・フェリペ	炭焼き, 薪売り, 石灰売り, 洗濯屋 (インディオ人口が多い)
サンタ・グェダルーペ	商人, 大工, 帽子屋, 革なめし職人, 革職人, 仕立屋, プリキ職人, ローソク屋, 祭具製作 (カーニバルの衣裳, 役職用の杖の銀細工, 帽子), 居酒屋
サン・アントニオ・イ・トラスカラ	小規模の商人, 行商人, 石工, 花火職人

未だ発生・伝播していない専門職種を独占することによって、ラス・カサスは地域社会の中心的な位置を維持しているのである。

さて、上述のような地域モデルを念頭においてオアハカ州を眺めると、どのような事実がでてくるだろうか。

ワンテベックの市はチャパス州と関連しながらも活動の主力をオアハカ市にむけている。

以上4つの市場網のブロックの内、チャパス州のモデル、つまり地域 (*región*) モデルが割合的確に当てはまるのは3) 山地ミヘのみである³⁾。1) 平野部の市では市場経済に慣れた農民間、もしくは農民とオアハカ市その他の商人との間の階層間の取引がある [Cook and Diskin 1976: 22]。2) 山地サポテカの場合はこの市を支配するメトロポリが同民族の山地サポテカカトラコルーラ、ミトラのような平地サポテカの村であるから、支配-従属の関係がなだらかで、二者の関係は異文化間の支配-従属関係を示すチャパスのモデルとは大幅に異なる。4) テワンテベック地峡部の市場網は主として地峡部のメスティーソと、オアハカ市、ミシュテカ高地 (プエブラ州につながる)、チャパス州のメスティーソ商人との間の取引のためにある。ただ特記すべきこととして、テワンテベックの女行商人がチョンタルとウアベ (族) より海産物を買取る時にはメスティーソとインディオ間の支配-従属関係が露出する [Eder 1976: 68; CHINAS 1976: 174-176]。ただし、両者間の取引の量は規模が小さい。

本稿で扱うミヘの場合、ミヘの市が異民族のサポテカの市に支配されるという点で地域モデルが当てはまるとはいえ、メトロポリに当るものがサポテカの村ミトラであることが特色である。市場経済に慣れ、メスティーソに近いが⁴⁾、インディオ的特性を未だにそなえたミトラがメトロポリである点はラディノの町ラス・カサスをメトロポリとするチャパス・モデルと大いに異なる。

2) 山地ミヘの市場網を素描すると、中部ミヘと高地ミヘ⁵⁾ の村々の市は各々地方の中心となる比較的大きな市を中間項として、最終的には高地ミヘのアユトラの市に結ばれていく。同時に、中部ミヘと高地ミヘでも山地サポテカに近い村の市はヤララグの市とも関係が深い。トラウィはその例である。しかし、その関係はアユトラとの関係よりも薄く、近年道路の開通と相まって、アユトラの市の重要性はますます高まっている。そして、アユトラの市はミトラの市に支配され、さらにミトラの市自体がオアハカ市の市に支配されるわけで、ミヘからみれば二重の支配-従属の輪となる (地図1の矢印を参照)。このことは第2章と第3章の記述と分析で明瞭となるはずである。

3) ミシュテカ高地をオアハカの市場網の一つとして数える場合はこれにも地域モデルが当てはまる。

4) サポテカやミシュテカの一部、特にテワンテベックのサポテカはインディオと呼ばれるのを好まず、地域名で区別しようとする (例えば、テワナはテワンテベックの女の意味) 傾向のあることを既に1940年代に de la Fuente [1947] が指摘している。

5) 「山地ミヘ」の「山地」は Sierra の訳であり、Cook と Diskin の地図1 [1976] から明らかのように、高地ミヘと中部ミヘの村々を含む。

2. ミへ社会の生業と職業の分化

——サポテカとの関係において——

ミへ社会の生業と職業の分化の実態をトラウィとアユトラの例からみてみよう。トラウィは周辺市場村であり、アユトラはミへ最大の市場村である。当然ながら、トラウィはアユトラの市の勢力圏に入っている。

表2-1)はトラウィの生業と職業の分化をしめしている。農業が主な経済活動ではあるが、双系の同居家族による耕作を上まわる規模に至ることはなく、また、農地の所有が特定の家族に集中することもない。結果として、農業活動が村内での経済格差を生む要因とはなっていない。そして、農業外の経済活動が色々、農業と合わせておこなわれている。専業で特殊知識や技術を要するものを職業とすれば、小中学校と幼稚

表2-1) 高地ミへの村(トラウィ)の生業, 職業, 賃労

(+A=アユトラで加わるもの
 -A=アユトラにないもの
 他はトラウィを中心にして列挙してある
 下線を引いたものについては第3章でのべる)

u003c/div>

生業	農業	トウモロコシ	パン屋
		フリホル	花火職人
		カボチャ	アドベつくり
		大豆	石工, 大工
		ジャガイモ	-A イシュトレ製品販売
	-A	グリーン・ピース	プルケつくり
		唐辛子	-A ポンチョつくり
		桃	衣裳つくり
		野草	-A 陶器つくり
		竜舌蘭(プルケ, メス カル, イシュトレ用)	ローソクつくり
	-A	砂糖キビ(低地のみ)	小レストラン経営
		家畜	+A 粉ひき屋(トウモロコシ)
		牛	かつぎ屋
		ラバ	商人
		ロバ	職業
		山羊	小学校, 幼稚園の先生
		豚	INIのプロモートル
		うさぎ	賃労
		鳥類	道路工事
		七面鳥	中部, 低地ミへの村の
		鶏	コーヒーの取入れ
		鳩	チャパス, ソノラ, シ
	農業外の活動	炭焼き	ナロア州への農業労働者
		肉屋	

803

園の先生と INI のプロモートル（インディオでスペイン語ができ、村の発展政策に参与する青年達）だけが職業らしきものである。メキシコ国家のインディオ対策の進展にともない、上の2種の職業は村々に青年のエリート集団をつくりつつある。市で活躍する商人の種類については第3章で別に考えたい。

さて、表2-1)はアユトラではどのような修正をうけるだろうか。農業ではグリーン・ピースはトラウィの特産物であり、アユトラではつくられない。砂糖キビもアユトラではつくられない。逆に、肉屋はアユトラではトラウィより大規模となり、專業に近い。同村にくる中部ミへと高地ミへの総てのムニシピオが買手となるからである。なお、アユトラは1930年代に衛生的屠殺技術を習得して以来、同村の肉はミへ間で人気をえたのであった。トラウィにあってアユトラにはない農業外経済活動としてはイシュトレ（竜舌蘭からとった繊維）製品販売、ポンチョ作り、土器作りである。逆に、アユトラでは電動の製粉機を持つ粉ひき加わる。トラウィとアユトラの村の規模の差は見た目には大きい、分業面では余り大きくないことがわかる。

さて、周辺市場村のトラウィを平均的ミへの村と考えた場合（事実そうなのであるが）、その生業レベルから予想される以上の物資や品物が実際には村にある。これがどうして可能になるかという、一つには第3章でのべる市での売買によるものであるし、二つには、ミへを支配しているヤララグやミトラにある豊かな生業内容のおかげなのである。

表2-2)にヤララグにある生業の内ミへにないもののみを記してみた。資料は1940年代のものである。表2-3)にはミトラにある生業の内ミへにないものを記してみた。資料は1930年代と1960年代のものによる。

以上、ミへ、ヤララグ、ミトラについての時間的落差のある資料から正確な推測はできないとしても次の事実は明らかである。つまり、ミへの村とサ

表2-2) 山地サボテカの村ヤララグの生業
(高地ミへにないもののみ列挙)
(下線を引いたものについては第3章にてのべる)

1940年代 (de la Fuente 1949: VII-IX 章)
サンダル製造
帽子屋
布屋
織工
石けんづくり
ローソク屋
紙タバコづくり
家具づくり
鉄関係の職人
真鍮細工師
花火職人
祭具の店
楽師、ダンス教師
床屋 (ミへの客が多い)
パネラづくり
ソーダ・ポップ屋
パン屋
メスカル、テパッチェ売り (ミへの客が多い)
行商人
女行商人

黒田 生業, 市, 商人

表 2-3) 平地サポテカの村ミトラの生業と職業

(+=高地ミヘにないもの
○=専門化したもの, 往々にして外部からの婚入者の手になるもの)

1929-33年 ([PARSONS 1936: 2章] による)	1968年 (Ramirez の調査資料 [BEALS 1975: 245-260, Appendix 36] による)
+木彫, 木製品の製作 (チョコレート棒, 聖人像, 絵)	
+粉ひき	
⊕パン屋 (マルケソーテのパン, ビスケット)	
+レストラン (ミヘ用)	
+居酒屋	
+カカオ, チョコレートひき	
+床屋	
+ベルト織工 (スカートはトラカラーでつくる)	+ショール編み
+織物 (ティオティワカンより学ぶ)	村の総家族の半数が関わっている
⊕仕立屋 (サンダルもつくる)	増加
⊕なめし屋 (サチーラ出身)	
○大工	
○石工	
+ハチ蜜取り	
+メスカル作り (女)	メスカル製造
+アルファルファ作り	
+イシュトレのロープ作り	
+ローソク作り (5~6人専業, 内1人はマヨルドーモ専用のローソク作り)	
⊕鍛冶屋	+金銀細工師
+靴屋, サンダル作り	+土偶製作
+醸造専門家	+風呂屋
⊕花火職人 (ミアウトラン出身?)	
+造花作り	
+獣医	
+行商人 (成人男子371人中140人)	各種の商人 (本稿第3章にてのべる)

ポテカの村には生業の差が大きく, ミヘの生業の乏しさはサポテカの生業の豊かさによっておぎなわれており, 逆に, サポテカの村の豊かさがミヘの村の乏しさを永続化してきたともいえる。

この豊かさと乏しさの間を往来して成立するのが商人という職業であり, ミヘの市に存在する商人の分化, ならびにミヘの商人と協力・競争関係に立つミトラ, オアハカの市で活躍する各種商人のタイプを次章で紹介したい。

3. ミへの市^{いち}, サポテカの市^{いち}, オアハカ市の市^{いち}にみる商人の分化

1) ミへの市と商人

(1) 周辺市場村トラウィの市と商人

この村の市の配置は図2のようであり、次のようなタイプの商人が活躍している。

①カセテロ (casetero) はカセタ (caseta 常設の小屋状の店) を持ち、主にミトラやオアハカからきた商品を持ち、逆に、中部ミへの諸村からくる換金作物であるアボガドとコーヒー豆を仲買してミトラの商人に渡す。商人としての資本も大きく、経済エリートになりうる。小型トラックを買う位の余力もある。

②プエステロ (puestero) は台の上に板を置いて、その上に商品をおく (poner) 人が多いのでこの名がある。カセテロより小規模の露天商で、市の日や祭日に店をひらく。中に、カセテロに移行できる余力をたくわえる者がいる。

③プロピオ (propio) は自前の生産物 (農作物, 工芸品, 調理した食物) を売っている人のことで、村人や近村の人が誰でもなれる。商人以前の存在である。

④ビアヘロ (viajero) は行商人で、隣村のタマスラパム出身で何でも屋の役割を果たすビアヘロとチチカステペック村とテパントラリ村のメスカル売りのビアヘロがトラウィに現われる。

なお、つけ足しになるが、①カセテロと②プエステロ、特に①のために、かつぎ屋

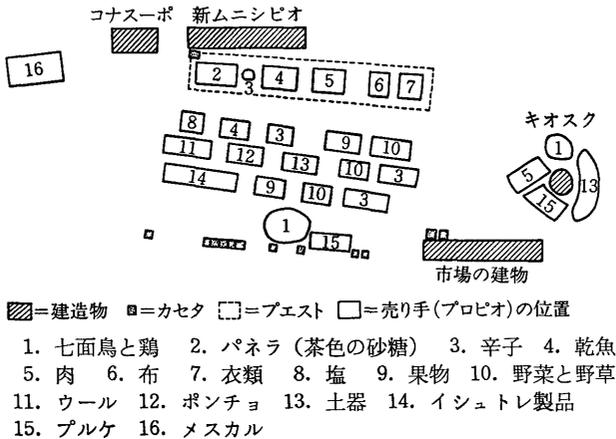


図2 トラウィの市の概念図 (1974年3月以降)

う重複するかは不明である。若干重複する者があると推測される。ミヘ地域でコーヒーとアボカドを買い占める。この商人の活動圏は広く、テワンテペック、チャパス、オアハカ市、プエブラ、メキシコ市に及ぶが [BEALS 1975: Appendix 39], ミヘ地域での活動が主な活動である。

②カセテロ。ミトラの商人ばかりである。コーヒーとアボカドを仲買いし、ミトラからはトウモロコシ、豆、野菜類、その他あらゆる商品を持ち込み、小売りと卸し売りの両方を行なう。少量ながら、バナナ、オレンジ、山羊、羊をミヘから買い取りもする ([BEALS 1975: Appendix 38] と私の現地の見聞による)。

③プエステロ。ミトラに限らず、オアハカ、シエラ・フェレス、ディアス・オルダス、カホノス諸村、ヤララグから参加している。売る商品と品物に専門化がみられる。

④ビアヘロ。アリエロ (馬子) ともいわれる。バス開通前に大活躍していたラバを使った隊商のなごり。ミトラからの商品をラバに乗せて、アユトラにある駐屯所を発ち、道路の通じていない中部ミヘと高地ミヘの村々に商品をおろし、帰路にコーヒーやアボカドを持ってかえる。以前は、2～3カ月の長期の旅であつたらしい。ビアヘロとコメルシアンテ、カセテロは相互に関係があるが、詳細については未調査である。

⑤ビアヘラ (viajera)。ミトラの女行商人のことで数は少ない。チーズやソーセージを持ちこみ、逆に、ミヘからはオレンジ、桃、花などを買ひ、ミトラ方面に持ちかえる。中にはテワンテペックまでいく人もいる。バスに乗ってくる小型の行商人である。

以上、アユトラの市で活動するミヘ以外の商人を紹介してきたが、ミトラの市の商人もその種類にちがいはないので、後者の場合の商人の分化については省略することにする。

2) オアハカ市の市^{いち}と商人

ミトラの商人とオアハカ市の商人の関係をしめす明確な資料はないが、オアハカ市の市で活躍する商人の種類を検討することによって、その関係を若干推測することができる。同市には3カ所の常設市場があり、活動する売り手は2～3,000人、客の数は3万人の規模である [WATERBURY 1968: 84]。なお、土曜日に市の日がきまっており、平野部の市のサイクルの一つに組みこまれている。同市の市場を調査した Waterbury によると、6つのタイプの商人がいる [WATERBURY 1968: 45-53]。規模の大きなものから記すと次のようである。

①アカパラドール (acaparador)。中～大型卸し売り業で、コーヒー、アボカド、ピーナッツ、アルファルファ (牛の飼料)、トウモロコン、豆をあきなう [WATERBURY 1968: 52-53]。次にのべるマヨリスタとどちらが規模が大きいか明確ではない。

②マヨリスタ (mayorista)。大規模な卸し売り。倉庫を持っているのでボデゲロ (bodegero) とよばれる。工業製品、果物と野菜を専ら扱う。Malinowski と de la Fuente がこの地の市を調査した頃は存在しておらず、第2次世界大戦後発生した。出身をみると、意外にもオアハカ出身者が少なく、プエブラ州出身者が多い。遠隔地との取引の知識が要り、オアハカの土地の商人が出遅れたらしい。一方、フチタン、テワンテベック、トッストラのマヨリスタにオアハカ出身者が多く、プエブラの商人に押されたオアハカ商人の進出と推測できる。マヨリスタは商品を次にのべるロカトリオに売る [WATERBURY 1968: 5章]。

③ロカトリオ (locatorio)。常設の市場に店もしくは売り場をかまえている小売り業者。店をかまえている者をカセテロ、板の上に品物を並べているだけの者をプエステロという。市場の外部にプエスト (臨時の売り場) をはることもある [WATERBURY 1968: 4章]。

④アンブランテ (ambulante)。市場の中を移動しながら物を売る小規模の商人。品物をぶらさげたり、背おったりして、歩きながら客を得る [WATERBURY 1968: 50-51]。これを次にのべる二つの商人とどちらが規模が大きいかはきめがたい。

⑤レガトン (regaton)。小売りと卸し売りを兼ねた仲買業。市から市へと移動して、土地による値段の差を利用する [WATERBURY 1968: 48-50]。ミトラの女行商人や有名なテワンテベックの女行商人がこのタイプに入ると考えられる。

⑥プロピオ (propio)。近隣の農村からきて自家製の農作物や品物を極く小規模に売っている人のこと。ミトラからの女性が圧倒的に多い [WATERBURY 1968: 46-48]。

上にみてきたミトラとオアハカの商人の種類を関連づけて考えると次のような推測が成り立つと思われる。ミトラのコメルシアンテはオアハカのマヨリスタから買った物をミへに売り、ミへから買い占めた換金作物のコーヒーとアボカドをオアハカのアカパラドールに売る。このミトラの商人の役割に対して、アユトラやトラウィのカセテロがどう挑戦し、その役割を肩替りすることができるか。これは将来の観察を待ってはじめて答えがでる問題である。

4. 市場の経済外的要素

3章で商人の分化を素描したが、主に売買の規模と形式から考えたにすぎない。現実には各商人は市場で生き生きと活躍し、場をドラマにしたてる。市は生き物のように存在する。市の様子を伝えるのに「死んだようだ」(muerte), 「活気がない」(triste), 「まあまあだ」(regular), 「活況を呈している」(vivo) といった表現が使われるが、まさに人々が市を生き物のようにとらえている例である。市はまさに商人と客のおりなすドラマの場であり、この面の観察が必要である。以下に、私の限られた見聞を通じて注目すべき若干の点を挙げ、将来の研究の覚え書きとしたい。

1) 時

市には日、月、年のサイクルで活気に差のあることはいうまでもない。1日の内の変動は商人と客の出身地の距離と関係がある。例えば遠距離の参加者を持つアユトラの市は早朝から^{ひとけ}人気が多いが、近距離の客しか持たないトラウィの市は開くのがおそい。村に戻る時間を心配する必要がないからである。月毎の変動には余り法則性がない。年間の変動は明確にあり、市場に来る人の村々の守護聖人の祭り、クリスマス、新年前に活気があふれるが、最高のにぎわいをみせるのは万霊節と復活祭の前の市である。

人は何故、^{いち}市をおとずれるのか、特に、売買以外の目的でくるのはどんな場合かという問題は今後もっと考えてよいことである。祭りやミサに出る途中、あるいは旅の途中で立ち寄る場合、徴税係りが普段みつけにくい村人を探しにくる場合、そして人に会いにくるだけの場合もあるようである。

2) 場

常設のカセタはプラサをかこむ表道路に面している。そして、週毎に立つ市は教会の前から広がる空間に設営される。その中心部分には比較的日常生活の高い品物売るブエストが並ぶ。アユトラの市では肉屋が屋根つきの回廊に並ぶが、この事実からこの地域一帯の肉を供給するアユトラの肉屋の勢力を読みとることができる。金額の大きな商売でも新規のもの、例えばオアハカやディアス・オルダスからくる毛布商人やオアハカの靴商人はプラサから遠い場所を与えられている。

市の中心から離れて周縁にむかうにつれ、「悪場所」がでてくる。アユトラでもト

ラウィでもテパッチェ売りの女性やメスカル売りは市の端のスロープに近い場所が与えられている。この場所では卑猥な言葉や野次が横行している。de la Fuente [1949: 145] はヤララグの市の端でみられる 売春を指摘しているし、テワンテベックの女行商人をしらべた Chiñas [1976: 182] はチャパスの労働者のキャンプ近くの市で、女行商人自身が売春行為により金銭をえている事実を暗示している。

3) 商人の「呼び声」と態度

種々の商人の内、呼び声をあげるのはミトラやオアハカ平野部からきたメスティーソないしメスティーソ化した商人である。特に、ディアス・オルダスの毛布売りはマイクを使って長い文句の呼び声をあげる。カセテロもプエステロもメスティーソの呼び声は短いが、それに表情がともなう。そして、その呼びこみ方は大きな商人程声高で、迫力がある。また、ミヘに対する優越を示す無遠慮さも覗かせる。

メスティーソとは対照的にミヘの商人はどの種であれ、殆ど無言で表情に乏しい。特に、サポテカを相手にする時、スペイン語の達者な者以外には防衛の姿勢がでてくる。しかし、目は注意深く相手を見つめ、口程に物をいっている。

インディオの売り手が沈黙の売り手であることはどの民族誌家も記録している。この理由を考える時に、「沈黙交易」にモデルを求めると、若干理解が進むのではないかと私は考えている。

栗本氏 [1980: 99-119] は、沈黙交易に言及して、この「口をきかない、接触忌避の交易」は「沈黙が要点でなく」、「異人（よそもの、制外者、ストレンジャー、アウトサイダー）」との接触をさけて行なう交易であった、と結論している。この説明はミヘの商人、特にプロピオの態度にそのまま当てはまる。ミヘでもカセテロの一部の商人はバイタリティがあって、ミトラの商人とも張り合える。しかし、プロピオは殆どスペイン語を話さず、異民族サポテカやメスティーソとの接触を明らかに恐れている。言語の障害からも、異民族忌避の心理からも、沈黙して市に坐っている結果となる。同じプロピオがミヘ同志に対する折は親しげになるが、その度合も出身村のちがいでよって差ができる。プロピオでもミトラやオアハカの市で活躍する者は市場経済に慣れており、呼び声と表情に富んでいる。

4) 買い方、売り方、だまし方

トウモロコシ、豆、唐辛子、小売りのコーヒー等、どんな単位で売られているかも調査を要する。この面について詳細な報告があるのは de la Fuente のヤララグの民

族誌だけである [DE LA FUENTE 1949: 134-136]。

買い手は手や指をつかって品物を長時間、綿密にしらべ、売り手との間に値引きを成立させる。強制的値切りといってよいものもある。例えば、サポテカの世慣れた行商人はオレンジ、桃、花を売るミへのプロピオには数をだまし、その上、良い品だけを抜き取ろうとする。

売り手にも手管がある。秤にしかけをしたり、唐辛子を目方で売る折は水をふって「水増し」したり、量で売る折はかさを大きくみせたり、何処でも考えそうな手管を使う。

商人が買い手にまわる場合、そのすばやい判断力は商人‘らしさ’をつくっていく。Chiñas はテワンテベックの女行商人がチョンタルやウアベから海産物を買取る際、秤もつかわず、すばやく鮮度をみきわめ値づけする様を報告している。また、同じ女行商人がオアハカ市で海産物をさばく時、^{いち}市の終りが近づくと、機敏に特売して売りつくす様もみごとである。また、値切る客に対して、テワンテベックの女行商人は独得のスタイルで腕を胸に組んで、まるで相手をみていない様な目付きで客をいなし、世に有名なテワナの‘らしさ’がでてくる [CHIÑAS 1976: 175-179, 183]。

5) 商人をとりまく人びと

市の喧噪をますものに商人をとりまく人びとの動きがある。ミトラからくるトラックの助手はマチュテロとよばれ、そのかけ声はアユトラの市に欠かせないものである。また、荷物をはこぶカルガドールの姿はどこにもみえる。市への参加費を徴収する村役人はプエステロとプロピオの間を歩きまわっている。プエステロが村役場に支払う税金の査定に便宜をはかることもあるし、プロピオの参加費は売り上げ高によるのが建前だが、徴収額の決定にも手心を加えることがある。人間関係が物をいうのである。

おわりに

以上、ミへ社会をオアハカ地域社会全体の中に位置づけて、生業と、職業の発生と分化に焦点を当ててみた。しかし、生業の優先するこの社会では、‘職業’となりうるのは学校の先生、INI のプロモートル以外には商人しか存在しない。そこで、色々のタイプの商人像の中に商人の発生と分化の姿を若干探ってみたつもりである。

商人の内でも比較的有效なカセテロやプエステロはミへ一般を代表するプロピオと将来どのような関係に立っていくのだろうか。この問題はミへ社会内の階層分化の可

黒田 生業, 市, 商人

能性と関連している。一方、ミへのカセテロはミトラやオアハカの商人に対抗できるのだろうか。この問題は、ミへ地域とメトロポリタンのミトラとの従属-支配の図式の変化の可能性と結びついている。当稿では、これらの問題を指摘するにとどめ、結論は将来の観察を待つことにしたい。

市や商人の活動は UCLA のオアハカ市場研究プロジェクトで扱われ、メキシコの他地方の市の研究に比較して豊かな資料を提供しながらも、Cook [1976] の結論に代表されるように、実に形式主義的な研究が優先しすぎている。将来は、これらの資料を基盤にとりながら、市や商人の動きにみられる経済外的要素にまで目を向けることが必要である。ミへの商人、ミトラのサポテカの商人、オアハカ市の商人の差は商人としての規模の差に加えて、民族文化のちがいがあがる。つまり、ミへ、サポテカ、メスティーソの経済関係は広く社会・文化関係の一部として把握されるべき現状にある。文化間の関係を社会階層間の関係に還元できる部分も大きい、それでは説明できない部分の多さが目立つのが現状である。メキシコのインディオの経済状況を文化の問題として捉えるか、社会階層の問題として捉えるかについては近年メキシコの人類学者と社会学者の間で議論が高まっており、この問題については別稿で扱いたい。

謝 辞

共同研究「職業の成立とその分化についての比較研究」(研究代表者 野村雅一助教授)に2年間参加させていただく内に、私には不案内なこの分野について若干の知識と見解をえることができたことに対して、同研究会のメンバーの方々に謝意を表したい。当稿は1979年と1981年の2回に渡って発表したメキシコのインディオ社会の生業と職業についての話をミへに焦点をあててまとめたものである。阿部謹也先生、野村雅一、重松伸司、高田公理、夫馬 進、土屋敦夫、関根康正、関本照夫、松井 健、小林致広、末原達郎の各氏から有益な御批判と質問をいただき、おかげで諸所修正することができた。ここに記して、各氏に謝意を表したい。

草稿の段階で垂水 稔助教授と石森秀三氏から有益な御批判をいただき、いろいろと修正をすることができた。両氏に深く感謝したい。また第一校は私がスペイン滞在中に刷り上り、山本紀夫氏に手を加えていただくことになった。記して同氏に謝意を表したい。

文 献

AGUIRRE BELTRÁN, Gonzalo

1954 A Theory of Regional Integration: The Coordinator Centers. *America Indígena* 15: 29-42.

BEALS, Ralph L.

1945 The Ethnology of the Western Mixe. *The Univ. of California Publications in American Archaeology and Ethnology* 42: 1-176.

1975 *The Peasant Marketing System of Oaxaca, Mexico*. Berkeley, Univ. of California Press.

- 1976 The Oaxaca Market Study Project: Origins, Scope, and Preliminary Findings. In Scott and Diskin (eds.) *Markets in Oaxaca*, Austin, Univ. of Texas Press, pp. 27-44.
- CHIÑAS, Beverly
 1976 Zapotec Viajeras. In Scott and Diskin (eds.), *Markets in Oaxaca*, Austin, Univ. of Texas Press, pp. 169-188.
- COOK, Scott and Martin DISKIN
 1976 The Peasant Market Economy of the Valley of Oaxaca in Analysis and History. In Scott and Diskin (eds.), *Markets in Oaxaca*, Austin, Univ. of Texas Press, pp. 5-26.
- COOK, Scott and Martin DISKIN (eds.)
 1976 *Markets in Oaxaca*. Austin, Univ. of Texas Press.
- DE LA FUENTE, Julio
 1947 Definición, Pase y Desaparición del Indio en México. *América Indígena* 7(1): 63-69.
 1949 *Yalálag: Una Villa Zapoteca Serrana*. México, INAH Serie Científica, Núm. 1.
- EDER, Herbert M.
 1976 Markets as Mirrors: Reflectors of the Economic Activity and the Regional Culture of Coastal Oaxaca. In Scott and Diskin (eds.), *Markets in Oaxaca*, Austin, Univ. of Texas Press, pp. 67-80.
- 広末 保
 1975 『遊行・悪場所』未来社。
- 栗本慎一郎
 1980 『経済人類学』東洋経済新報社。
- 桑野 隆
 1981 『民衆文化の記号学——先覚者ボカトゥイリョフの仕事』東海大学出版会。
- MALINOWSKI, B. and Julio DE LA FUENTE
 1957 La Economía de un Sistema de Mercados en México. *Acta Antropológica*, Epoca 2, Vol. 1, No. 2.
- MARROQUIN, Alejandro
 1957 *La Ciudad Mercado (Tlaxiaco)*. México, UNAM.
- NAHMAD, Salomón
 1965 *Los Mixes*. México, Memorias de INI, Vol. 2.
- PARSONS, E. C.
 1936 *Mitla: Town of Souls*. Chicago, Univ. of Chicago Press.
- STAVENHAGEN, Rodolfo
 1968 Clases, Colonialismo, y Aculturación: Ensayos sobre un Sistema de Relaciones Interétnicas en Meso-América. In Miguel Othon Mendizábal (ed.), *Las Clases Sociales en México*, México, Editorial Nuestro Tiempo, pp. 109-171.
- SIVERTS, Henning
 1969a Ethnic Stability and Boundary Dynamics in Southern Mexico. In Barth (ed.), *Ethnic Groups and Boundaries*, Little, Brown and Co.
 1969b *Oxchuc: Una Tribu Maya de México*. III, Ediciones Especiales 52.
- TAX, Sol
 1953 *Penny Capitalism: A Guatemalan Indian Economy*. Smithsonian Institution Institute of Social Anthropology Publication No. 16.
- WARNER, John C.
 1976 Survey of the Market System in the Nochixtlán Valley and the Mixteca Alta. In Scott and Diskin (eds.), *Markets in Oaxaca*, Austin, Univ. of Texas Press, pp. 107-132.
- WATERBURY, R. G.
 1968 *The Traditional Market in a Provincial Urban Setting, Oaxaca, Mexico*. Ph. D. dissertation, UCLA.
- WATERBURY, R. G. and Carole TURKENIK
 1976 The Marketplace Traders of San Antonio: A Quantitative Analysis. In Scott and Diskin (eds.), *Markets in Oaxaca*, Austin, Univ. of Texas Press, pp. 209-234.